OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井木菟麻呂『懐徳堂水哉館先哲遺事』巻一・巻二翻刻
Author(s)	釜田, 啓市
Citation	懐徳堂センター報. 2008, 2008, p. 69-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24426
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂センター報２００８（大阪大学大学院文学研究科・文学部 懐徳堂センター 二〇〇八年二月二九日発行）

中井木菟麻呂『懐徳堂水哉館先哲遺事』巻一・巻二翻刻

釜田啓市

はじめに

筆者は前号『センター報』で中井木菟麻呂『懐徳堂水哉館先哲遺事』（以下『先哲遺事』と略）を西村天囚『懐徳堂考』と比較しながら紹介した。今回はその『先哲遺事』全七巻の内、巻一・巻二の翻刻である。

『先哲遺事』は、その資料性の高さにも拘わらず、近年までその存在すら知られることなかった。現在は懐徳堂研究者を中心に用いられるようにはなったが、それでも依然として稀覯性の高い書籍であることには変わりはない。そこで今後の懐徳堂研究の発展のため、翻刻することとした。

『先哲遺事』そのものを一見されれば即座に了解されることと思うが、『先哲遺事』は決まった書体で書かれた書籍ではない。その内部は崩し字も多く、また漢字の字体も統一されてはいない。これが今回の翻刻で最も苦慮した点であるが、字体の問題はできうる限り『先哲遺事』に沿うこととするものの、フォントの問題もあって必ずしも字体の問題はクリアされていないことをご了解されたい。字体・フォントの問題よりも『先哲遺事』の内容を紹介することに重点を置くこととしたためである。

なお、崩し字に関しては池田憲雄氏に多大なご協力を得た。氏のご協力がなければ本稿は成立しえなかった。ここに厚く感謝の意を申し上げる。また翻刻に際しての誤記等があった場合、その責はすべて釜田にあるものとする。

懐徳堂水哉館遺事

懐徳堂水哉館諸先哲中、甃菴ニハ貽範先生行狀アリ、履軒ニハ不完全ナガラ履軒先生行狀ノ草稿アレドモ、竹山其他ニハ墓誌銘ノ外ニ言行ヲ載述シタル者ナシ。外祖寒泉翁嘗テ予ニ謂ヒテ曰ク、吾在世中、必竹山履軒両先生ノ傳ヲ撰述スベシ、我死セバ、事蹟多ク堙滅セン、之ヲ傳スル者、我ニ非ズシテ其レ誰ゾヤト。而シテ之ヲ筆スルニ及バズシテ世ヲ逝ラレタリ。今ニシテ之ヲ傳セント欲スレトモ、事蹟ノ徴スベキ者極メテ少シ。頃者西村君天囚ガ懐徳堂考下編ヲ纂述セラルルニ當リテ、其材料ヲ求メラレタレバ、僅ニ家ニ存スル所ノ記録ト並河翁ノ直話トヲ収輯シテ、一助ニ供スト云フ。

但し賀陰集懐徳内外記學校公務記録其他ノ遺書、并ニ在津紀事、近世先哲叢談等ニ載スル所ノ事蹟ハ略ス。

明治庚戌歳杪　　黄裳識

頼春水先生モ竹山傳編纂ノ為ニ留心セラレタリト見エテ、竹山没後石窩ニ寄セラレタル書中其事ニ及ベリ、今之ヲ左ニ抄録ス。

先君子御行狀御墓誌表共如何と御尋申候所未被爲及其儀候段御面上承り候鴻業嘉績何分御思召立可然候私儀此御儀ニ所謂携り申度奈とゝ申儀ニハ毛頭無之足下御相續諸事ハ御蝟集可仕候へハ多人より引立不申ニ者御取付難成候半と乍不及賛成仕度候も御生前御懇厚故被下云々

竹山遺事

○名號

名二子説　　甃菴

孟生名以善、季生名以徳、既行冠儀、請字予、曰汝知夫海与山耶、山積土、以成山、海積水、以成海、人積善与徳、以成人、善徳之外、吾又何言、遂字以孟善季徳、善耶徳耶、積焉、勉旃、

天生按ズルニ、コノ文面ニヨレバ、冠儀擧行前、既ニ善徳二字ヲ以テ二子ノ通称ト為シタルコト知ルベシ。是レ二子共ニ出生シタル後、殊ニコノ二字ヲ撰ビテ、公称セシモノナルカ。サスレバ竹山ニハ別ニ幼名ガナクテハ叶ハヌ筈ナレドモ、幼名ノアリシコトモ傳ハラ子バ、或ハ先ニ生レタルヲ善太ト名ヅケオキタルニ、後ニ又一子ヲ得タレバ、之ト相對シテ徳二ノ名ヲ命ゼシニヤ、詳ナラズ。積善積徳ハ無論コノ語句ノ間ニ於テ定メラレタリ。唯孟善季徳ノ字ハ此ニハ命名セラレタレドモ、遺墨ニモ、図章ニモ、嘗テ之ヲ用井タルヲ見ズ。其慣用シタル子慶處叔ノ字ハ、後ニ改メテ命ゼシモノカ、但之ハ自撰シタルモノナルベシ。

子慶ノ出處ハ更ニモ言ハズ、處叔ハ季叔ノ義、竹山同關子等ノ解ハ僉陰集答木村子忠書ニ見ユ。

○嬰孫時代ノ事

竹山ノ嬰孫時代ノ事ニ付キテ傳ハレル話ハ、其出生後、東涯先生ガ懷德堂ヲ訪ハレタル時、父甥菴ガ「私ニモ男子ガ生レマシタ」トテ嬰孫ヲ示サレタルヲ、東涯先生ハ、ドレ〳〵ト云ヒツヽ、之ヲ受ケテ膝ノ上ニ置カレタルニ、折悪シク放尿シテ、其衣ヲ汚シタレバ、東涯先生ハ、「此ノ児ハ成長ノ後、我ニ小便ヲカケルヤウナ者ニナルカナ、」ト云ハレタリトノコトナリ。並河寒泉翁話

○幼年時代ノ事

竹山履軒ガ幼少ノ頃ニハ、冬日ニハ毎朝未明ニ起キ、一人ハ手桶ヲ提ゲ、一人ハ竹帚ヲ擔ギテ、淀屋橋ニ往キ、霜白ク置キワタシテ、未ダ人ノ屐痕ヲ印セザル橋上ニ立チテ、手桶ヲ硯ニ、竹帚ヲ筆ニ擬シテ、帚ヲ擔ギ、且歩ミツヽ、カハル〳〵大字ヲ習ヒタリト云フ。寒泉翁話

○少壯時代ノ事

竹山ガ履軒ト懷德堂ニ同住セシハ、履軒ガ高辻菅公ノ聘ニ應ジテ入京スル頃マデナルベシ。履軒ノ入京ハ、明和三年丙戌ニシテ、竹山三十七才、履軒三十五歳ノ時ナリ。懷德堂ニ同住セシ時ノ事ニテ文詩ニ見ユルモノニハ、古風ノ中ニ、書寧靜舍壁示諸子ト題スル一篇アリ。寧靜社トハ懷德堂寛政類燒前ノ塾舍ノ名称ナルベシ、ソレハ天明二年壬寅ノ年ニ製シタル大阪學校之図ニ、菜名克一書于寧靜舍トアルニヨリテ知ラル。他ニ寧靜舍ノ字ハ見當ラヌヤウナリ。殊ニコノ寧靜舍ノ額ハ履軒ノ書ニテ、今ハ大槻如電翁ノ所藏トナレリ。大槻盤渓ガ其學舍ニ寧靜館ノ名ヲツケレラレシハコノ額面ヲ獲タル故ナリトゾ。又按ズルニ、竹山ノ左傳比事跋ノ序ニハ、寶暦六年歳次丙子夏四月哉生明書於龍珠樓トアリ。又履軒ノ履軒幽人傳ハ壯歳ノ作ナルガ、其中ニハ幽人居一樓、南北有牖、南棚葡萄延蔓、盈區、翠光撼席、實之離ヽ、可頽而哺也、故命斯樓曰龍珠之樓トアリ。均シク龍珠ヲ以テ樓ニ名ヅケタルハ、本同一ノモノニテ、案ヲ聯子テ書ヲ講ジタル頃ノ事ニアラズヤ。寶暦六年ハ竹山二十七、履軒二十五ノ時ナリ。兄弟同住シタル時ノ事ハ、此ノ外ニ多ク知ルヲ得ズ。

西岡ノ姻家革島氏後見ノ事

山城國葛野郡川嶋村、所ノ惣名京都西岡ナル革島ト云フハ、竹山ノ妻ノ實家ニテ、兵庫ト云ヒシ人ハ、其父ナルガ、兵庫死シテ後、其子政之介（後左門、又瀬左衛門、名文蔚、字君豹、竹山ノ妻ノ弟）尚幼少ナリシ故、竹山後見トナリ、明和元年甲申ノ八月ヨリ、妻子ヲ携ヘテ西岡ニ赴キ、一年間バカリ留マリテ、家事ヲ整理シ、其後ハ隔月ニ往クコトヽナリ、政之介ハ懷德堂ニ引キ取リテ教育セシガ、安永六年丁酉年巳ニ長ズルニ及ビテ、郷里ニ歸リテ家

ヲ興サシメタリ。竹山ガ後見中、竹林ノ採伐、米穀ノ収穫等、一切ノ収支ヲ自筆ニテ記録シタル大福帳一冊、今モ同家ニ珍蔵セリ。（西岡集及篁陰集ノ革島生名字説、送皈郷序、参看。）

○竹山ノ三大事業

竹山一代ノ事業ハ、閑道ノ業ニ於テハ、五井蘭洲ノ遺命ヲ奉ジテ非物篇ヲ訂正スルニ次ギテ、非徵ノ著アリ、此レ天明間ニ在リ。書堂經營ノ事業トシテハ、寛政四年夏五月ノ大火ニ遇ヒ、五年間ノ斡旋ニヨリテ堂構復初ノ功ヲ奏シタル事ナリ。修史ノ業トシテハ、東照后ガ撥亂反正ノ偉業ヲ不朽ニ傳ヘン為ニ逸史ノ著アリ。逸史ノ著ハ、自序ニハ天明年間書成而秘于巾笥トアリ。進牋ニハ紬繹既逾三紀トアリテ、即約三十六年以上ヲ費シシナリ。寒泉翁ノ話ニ、竹山ガ逸史著作ノ事ヲ思ヒ立チタルハ十八歳ノトキニアリト聞キ居タルガ、其十八歳ナル延享四年ヨリ起算スレバ、三紀ハ天明三年ニ當レバ、其前後ニ脱稿セシモノト知ルベシ。

竹山ノ業ハ、右ノ外、詩學ニハ詩律兆アリ、政治經濟ニハ草茅危言アリ、詩文ニハ篁陰集アリト雖、一代ノ偉蹟ヲ擧グレバ、先ヅ指ヲ右ノ三事業ニ屈セザルヲ得ズ。故ニ丸川松陰ノ竹山墓誌銘ニモ、學校再建ノコトニハ及バザレドモ、殊ニ他ノ二字ヲ擧ゲタリ。併シ以上ノ三大事業ノ中ニモ、竹山自身ハ其天職ヲ遂行シタル事ニ於テ、閑道承聖ノ業ニ重キヲ置キタルハ、其肖像ノ自賛ニ、皐比坐斷四十餘年云云 篁陰集ノ語ヲ題セシヲ見テモ知ルベシ。其經解ニハ、易斷及び詩經禮記學庸論孟ノ首書アリ。經解ニ付テノ話ニハ、竹山児孫ヲ戒メテ、蕉園石窩二人ノイヅレカナルベシ。「我ガ無キ後ニモ、汝等我ガ經説ヲ讀ミテ、先人ハ最ナル事ヲ言ウテオカレタト言ウコトハナラヌゾ」ト云ハレタトハ、寒泉翁ヨリ聞キ居タル話ナルガ、松村操ノ近世先哲叢談ニハ、竹山没後、履軒ガ懐徳堂ニ来講セシコトヲ述ベテ、伯氏經業、小子當學焉、若幽人之事、可不必倣焉、ノ語ヲ記シタレバ、ヨク似タル話ユエ、イヅレカヾ誤ナルニアラズヤト思ハル。

竹山ノ經説ハ易詩經禮記學庸論孟ノ外ニアリヤ否ヤ、家ニ藏本ナク、書目ニモ載セザレバ、詳ニ知ルヲ得ズ。右ノ諸經ハ、朱註ニ本ヅクハ勿論ニテ、其取ル所ノ諸説ハ、詩ニハ顧麟士、何玄子、劉安成、朱豐城、嚴華谷、輔慶源、鄭玄、呂東萊、歐陽子、禮ニハ楊鳳閣、方嚴陵、學庸ニハ陳新安、饒双峯、胡雲峯、史伯璿、許白雲、一、二ハ王陽明陸象山ヲモ、論語ニハ張自裂、袁了凡、郝京山、鄭申甫、高中玄、仲肥胡、陳新安、胡雲峯、孟子ニハ張南軒、徐儆弦、金仁山、陳新安、郝京山、袁了凡、姚承菴、黄葵峯、高中玄、伊藤仁齋等最モ多シ、説統及ビ諸家辨ヲモ多ク引キタリ易斷ハ図書館ニ差上置キタレバ略之。而シテ竹山曰、或ハ善按ノ自説ヲ以テ其間ヲ補綴セリ。其詩集傳及び學庸論孟ハ、朱墨狼藉、巻冊損壊シテ、苦心講學ノ跡ヲ留ム。唯易ハ首書ノ註本家ニ存セズ、別ニ其諸説ヲ集メテ、易斷ト名ヅク。經解ニ斷ノ字ヲ用井タルハ、唯此レノミ、然レドモ後々ニハ此ニ倣ヒテ、他ノ經解ニモ斷ノ字ヲ付スルニ至レリ。履軒ガ雛題ノ字ヲ七經ニノミ用井タルヲ、後人ガ他ノ諸書ニモ付シテ史記雛題、漢書雛題ナド称フルニ至リタルト同様ナリ。

○學校再興ニ関スル書類別紙冊
○竹山時代ニ於ケル學校公務文書別紙冊
○逸史献上記録別冊
（コレハ先年大阪市史編纂ノ際幸田成友氏ガ寫シ取ラレタル筈ナレバ御承知ノコトヽ存ズ入用ナラバ送ルベシ）
○逸史ニ関スル書状別冊
○逸史ニ関スル諸件

竹山ガ拝領ノ御紋服ヲ着セシ時ノ詩

七十今朝又添一献書深愧史名高云云（簣陰集）

御紋服ヲ着シタル肖像ガアリタル筈ナレドモ今ハ存セズ。

御紋服ハ、桐ノ箱ニ納メテ、大切ニ保存シタリシガ、追々朽敗シタル由ニテ、今ハ寸帛ヲモ留メズ。

逸史献上本ノ準備既ニ整ヒタル時ニハ、衙尹ヨリ學校ニ使者ヲ立テラレ、徹宵高張提燈ヲ掲ゲテ、警戒頗ル嚴ナリキ（寒泉談片、）

逸史ノ自序ニハ、凡五易稿トアリ、浄寫シタル本ヲモ合セテ五稿トスレバ、家ニハ二本アリ、肥前大村ノ橘某ト云フ人ガ一本ヲ得タリト聞キ、又仙臺ノ人ガ一本ヲ所持スル由ニモ聞キ及ビタレバ、其レ等ハ所有アルコトヽ思ハル。今一本ハ三十年前、大阪ニ於テ不在中ニ竊取セラレタル諸書ノ中ニアリタルヤウニ記憶ス。

逸史進牋ノ書式ニ付キテハ、諸大家ノ意見ヲ問ヒタル者ト見エテ、附箋シタルマヽノ草稿ガ、今ニモ家ニ殘レリ、コノ附箋ニハ朱ト墨トアリテ、墨ノ方ニハ、朱筆ノ評ニ對シテ祭酒ノ字ヲ書キ入レタレバ、朱ハ林祭酒、墨ハ古賀淳風ニテモアルベシ。進牋ニ付キテハ、表疏ノ類、漢魏已来ハ散文モアリ、四六モアリ、唐宋ニハ定マリテ四六ヲ用井、又宋已来ハ聲律ヲモ正ス、ト文體明辨ニモ見エタレバ、コノ進牋モ四六ニスルカラハ、法ノ嚴ナル方ニ従フベシトテ、少シ心ヲ用キタリトアリ。朱書ノ附箋ニモ、駢儷ハ、イヅレニモ声律オモニナルコト故、嚴ナル方然ルベシ、ト記シタリ。擡頭掲書、其他用語等ニモ、子細ニ注意シテ、僭逼ノ嫌ヲ避クルヤウナシタルガ如シ。又上納ノ時ハ、進牋自序、共ニ和解ヲ添ヘテ出シタルモノト見エテ、其下書ガ殘レリ。

逸史ノ文章ニ就キテハ當時ニモ學者間ニ彼此批評ヲ試ミタルモノアリタレドモ、要スルニ此等ハ、古典ニ確乎タル出處ヲ有スルコトヲ知ラヌ妄評ニテ、淺薄ノ譏ヲ免レズトハ、亦寒泉翁ノ談ナリ。

高辻前中納言ノ傳達ニテ、朝廷ニモ逸史ヲ獻上スル筈ニナリテ、其寫字装釘モ整ヒ居タルガ、幕府ニ對スル関係ニテ故障ノ生ジタル由ニテ、遂ニ見合セトナリタリ。其本ハ自分モ幼少ノ時ニ、藏書中ニ於テ見タルコトアリ、長方形ニテ茶表紙ガカヽリ、題簽ハ絹地ニテ、未ダ認メズニアリキ。蕉園手寫ノ

逸史モ家ニアリタレドモ、今ハ散逸セリ。

○竹山の身度

包紙寫

天明七年丁未八月大祥前ニ此
寸法ハ所ニ隨六七分一寸餘モ ツヽ
五十八歳
マル
未ノ八月五日掛目二十貫目
帰宅後九月十八日改候所総
寸法所ニ隨ヒ五分七分ホド
ツヽシマル
九月廿一日掛目廿四貫目
安永九年庚子八月但州着ノ翌日改
竹山居士身度
五十歳 八月十一日

コレヨリ
腹 神闕ニテ 三尺八寸五分

但し但馬ニテ入湯前ノ寸尺紛失
歸坂後寸法也 九月廿一日也

庚申七十一歳ノ
十一月廿一日此寸ニ減ス
安永庚子ニ二寸四分
シマル

左腕 腋下ヨリ 一尺五分ノ所 左右同
一寸五分ノ所

右脛 膝骨ノ下 屈處ノ下 各二寸一分ノ下
右一尺三寸八分 庚申 右 一尺二寸七分
左一尺三寸五分半 同左 一尺三寸一分

○懐徳書院ノ燕集

懐徳書院ニハ毎年正月十五日後ニ十六日、竹山ノ手簡ニヨレバ二十二日ノコトモアリタリト見ユハ後ニハ十六日、竹山ノ手簡ニヨレバ二十二日ノコトモアリタリト見ユガ稽古初ニテ、之ヲ初會ト称ス、午前ニハ、幼年子弟ニ授讀ヲ開始シ、午ニ及ビテ食饌ヲ饗シ、夜間ニハ、交友ノ為ニ宴ヲ張リ、席上詩ノ倡和モアリ、書畫ノ揮毫モアリ、殊ニ竹山ノ時代ニハ、四方ノ儒家トノ交際モ隆盛ニシテ、来往送迎ノ節ニハ講堂ニ宴ヲ張リテ、文酒徵逐シ、混沌社諸彦トノ會集モ盛ニ行ハレタルヤウニ見ユ、其頃ノ殘篇遺章ハ、今尚家ニ藏セリ、是等ヲ収輯シテ懐徳堂帖ヲ作ル筈ナリ。今ニ於テ當時交游ノ盛ナルヲ見ルベキ者、是ヲ舎キテ他ニ求ムベカラズ、其一二ヲ左ニ掲グ。

九月廿五日懐徳書院燕集詩　限韻不限體

麻韻　平壽王

竹日蘿烟一徑飾、認来絃誦是居家、依然楊子成玄草、孰與馬融下絳紗、沈醉遣懐琴弄鳳、交情報喜燭凝花、風流相値不相厭、美酒千鍾書五車、

其二

千里秋尊酒亦清、依然龍鶴有餘情、關西禮樂三鱣譽、江左文章二陸名、殘菊夕飡籬畔色、落梅春意笛中聲、新知為寫金蘭簿、門下風流桃李榮、

元韻　田子明

久欽懐德舊儒門、招飲欲探洙泗源、詩賦育才教駿至、図書講禮愛羊存、賓遊寧復論珠履、老懶無妨倒緑尊、秋盡偏憐黌舎煖、小春花鳥悩吟魂、

真韻　岡公翼

城中不染市中塵、懐徳鄉黌占有隣、負笈幾逢遊學友、携樽我亦問奇人、經筵黄巻千秋古、詞席英華一日新、莫怪霜前風物暖、粼粼領淂滿堂春、

文韻　筱安道

大江英彦日紛紛、奕葉鄉黌孰不聞、階下三鱣還入炙、池中雙鯉躍成文、枇杷花落荇苔砌、蘿薜影停巖岫雲、少小瞻君三十載、争知今日一堂醺、

齊韻　葛子琴

懐徳有隣夫子棲、汎容此日許提携、秋深人入芝蘭室、春近風和桃李蹊、滿架蠹編傳舊業、半池魚藻寫新題、醇醪既醉猶相惜、數仞蘿墻白日西、

微韻　賴千秋

市上古黌宇、箕裘逢掖衣、玄関非寂寞、絳帳有光輝、花卉小春景、杯尊欲夕暉、踈狂亦懐徳、豈道禮容非、

青韻　中村君彝

自紵黄冠照戸庭、琴尊興湧子雲亭、已看舊社情偏切、且喜新知眼更青、秋樹禽棲飛片錦、夜池魚躍亂寒星、領愁帰棹添離恨、莫笑終筵醉不醒、

蕭韻　中井子慶

江上昨夜冷兩蕭、曉来雲盡天沆寥、城中群彦新有約、竹門苔逕喜相邀、風流欲續文字飲、豪懷矻肆摩青霄、烹鮮漉醪動秋酌、直自清晝接良宵、飛單酒籌不外假、木葉片々入筵瓢飄、詩就不問洛紙貴、健筆先合書庭蕉、論交雖嘆相見晚、延津此夕恨全消、莫笑腐儒餐麁糲、一場已勝回也瓢

先韻　中井處叔

幽居守拙久、未接當世彦、佔嗶呻童蒙、著作委埃塵、今日分何日、邂逅慰我心、驟々天六龍、直下破霄漢、香帶月中桂、廣樂聞鈞天、悔齋四方志、不知枝頭春、

侵韻　早士譽

一堂秋杪會、群彦郢中吟、識面有新舊、論心無淺深、清風搖几席、落日映園林、為假陽春曲、不知金氣侵、紅燈承晷點、緑酒倒尊斟、因語初来客、歡娛繼自今、

庚韻　原耻叔

三徑秋深黄菊榮、澱陰此日聚群英、初看鹿洞陸朱會、好擬龍門孔李盟、庭寂芭蕉一両過、江寒鴻雁數聲驚、莫言歡宴無人識、天際高衝劍氣明、

陽韻　源君豹

翩々才子會、始属一書堂、倒屐陪詩賦、盍簪傳酒觴、九秋楓樹色、三徑菊花香、滿坐新知樂、偏憐夜漏長、

席上贈千秋賴君　處叔

愛君蓋世氣、文章厭二京、不朽君家事、寧負千秋名、

席上答謝處叔先生　千秋

同輝棠棣萼、隠映舊里京、寧比韓々美、豚犬我虚名、

席上奉呈處叔先生兼示君彝詞兄　子琴

荀家夜燕弟兼兄、五百里中星彩明、不用朝来煩史筆、瑶筵客有返皇京、

奉答子琴葛君　處叔

陳家詩盟聲價大、荀家零落空儒名、大史明朝應沈吟、德星半明半不明、

奉和葛君見示　君夷

江左文章属我兄、芳筵驚見夜珠明、扁舟従是載將去、能使光輝滿帝京、

席上奉呈處叔先生　安道

浪速両儒宗、吾儕得相挈、忽聽郢市詞、何讓伊川雪、

依韻和安道筱君　處叔

醉来氣壯哉、詩就揮椽筆、莫怪満堂寒、黒龍噴白雪、

席上呈岡葛賴三君　君夷

共喜群才子、聯翩上書堂、雄賦逢禰衡、清狂見知章、納交絶市再、即覺語言芳、無那隔南北、勝雪不可常、豈知道在邇、悔求諸遠方、

席上酬中村君君夷　子琴

今夕是何夕、晤言於一堂、濟々元多士、斐然各成章、物侯属小春、摛藻已競芳、況復盈樽酒、粲々覺非常、明朝相阻隔、賴不天一方、

○言行

高辻菅公ガ嘗テ光格天皇ノ御前ニ伺候セラレタル時、天皇ハ「朕ハ竹山ノ書ハ一幅モッテ居ルガ、履軒ノハマダ一枚モ有タヌ、聞ケバ、履軒ハアマリ書ヲカゝンサウジヤノウ」ト御諚アリタレバ、後日之ヲ竹山ニ話サレ、又履軒ノ耳ニモ入リタルニ、履軒ハ「ヨシ〳〵、天子モワシガ書ヲカゝヌコトヲサウ仰セラレタナラバ、尚々書キヤセン、」ト言ヒタリトカ。前川虚舟ガ此ノ話ヲ聞クト、天子知名ト刻シタル磁印ニ顆ヲ作リテ、竹山履軒ニ贈リタルニ、竹山ハ印匣中ニ存シタレトモ、之ヲ用井ズ、履軒ハイカゝシタルニヤ、存シ居ラズ。序ニ、前川虚舟ハ竹山履軒ノ印章、又懐徳堂藏ノ朱子四大幅等ヲ多ク刻シタリ。

先年今ノ高辻修長氏ヲ訪ヒタル時、談國字牘ノ建學私議ノ事ニ及ビシニ、アレガ本トナリテ、學習院ノ建立ヲ見ルニ至レリト語ラレタリ。

懐徳堂ノ文庫ニハ充棟ノ藏書アリタレトモ、コレハ石窗時代以後ノ事ニテ、竹山ノ頃ニハ、文庫ハ勿論ノコト、藏書類モ至リテ少ナカリシガ、佩文韻府、淵鑑類函ノ二書アラバ、大抵ノ事ニハ不自由ナカルベキニトテ、久シク望ミ居ラレシガ、遂ニ佩文韻府ヲ四十金ニテ購ヒ、隨ヒテ淵鑑類函モデキタリ。

今ハ二書散亡シテ、蕉園題簽ノ淵鑑類函目録ノミ殘レリ。寒泉談片

竹山ノ書法ハ、貧陰集書藤子常臨書東坡醉翁亭記後ノ中ニ、吾黨書法、昉於万年先生、至蘭洲春樓二先生相亜而起、其傳寝廣、ト云ヘル如ク、幼少ヨリ蘭洲先生ノ書ヲ學ビテ得ル所アリ、壮年ノ書ニハ、殊ニ筆意ノ傳統ヲ見ルヲ得、此ヨリ後、筆力縦横、一機軸ヲ出スニ至レリ。祝枝山ヲ學ビタル由ニモ傳ヘラル、楷書專顔法ニ據レリ。

竹山ガ作文法ヲ教フル言ニ云ク、文章ヲ作ルニハ、先ヅ韓柳歐蘇等諸大家ノ文ヲ通讀シ、諸家ノ中、其好ム所ヲ擇ビテ、表式ヲ定メ、而シテ後之ヲ反覆熟讀スベシ。一タビ酒ヲ盛リタル瓶ハ酒罄キテ後、之ニ他ノ液體ヲ入ルトモ、永ク酒氣ヲ留ムルガ如ク、平生愛讀スル所ノ作者ノ風格ハ、イツカ自己ノ製作上ニ移ル者ナリト。又云ク、文章ヲ作ルニハ、先ヅ十分ニ腹藁ヲ為シ、腹藁ノ成リタル後ニ筆ヲ執ルベシ、一タビ筆ヲ執ラバ聊カモ渋滞スルコトナク、一氣呵成ニ書キ下スベシ。儘語句ヲ成サヌ處、又ハ格好ノ熟字ヲ思ヒ出サヌコトアリトモ、夫ニカマハズ、左様ノ處ハ假名交ニカキテモヨロシキ故、淀ナク書キ終リ、而シテ後刪改スルヲ可トス。斯クセザレバ、一篇ノ中ニダルミガデキテ、語勢一貫セズ、ト教ヘラレタリト、寒泉翁ハ語レリ。此ニ付キテ翁ガ附言セラレシコトアレトモ、是ハ寒泉翁ノ條ニ記スベシ。

中井ト賴家トノ関係ハ、竹山ガ送賴千秋帰省序ニ云ヘル如ク、最初ハ才子ナリトノコトヲ聞キテ、深クハ其人ヲ信ゼザリシガ、平壽王ノ宅ニテ會見セシヨリ、始メテ交ヲ結ビテ、遂ニ親密ナル間柄ト為リタリ。其結婚ニ付キテモ、在津紀事ニ、余之於燕爾、竹山自為氷人、トアル如ク、春水先生及尾藤二洲先生ノ為ニ媒酌ノ勞ヲ執リ、飯岡義齋翁ノ二女ヲ自分ノ娘分ト為シテ、姉ヲ春水ニ、妹ヲ二洲ニ妻セタリ。飯岡義齋其先ハ佐々木義實公ノ別子飯岡義政ナリ義齋ノ曾祖関徳政章大阪ニアリテ医ヲ業トス篠田氏ト称ス

春水ガ藝藩ニ招聘セラルルニ至リシハ、竹山ノ勧ニヨリテ、大日本史全部ヲ手寫シテ、藝州侯ニ献ゼシコトガ其手續ト為リタリト、寒泉翁ノ話ニ聞ケリ。

序ニ藝藩ニ赴任セシ時ノ手簡ヲ左ニ記ス。

謹言春樓老翁及兩峯兄如何

新暦之御慶申様候御全家益安泰御重歳目出度奉存候其以来御遠ニ致打過申候私儀も玄冬歸省老父不快も復常其後も程本府儼書有之舊臘十七日於本府四十人扶持にて儒業被申付候同様ニ□増田来次香川修藏上申兩人□増ヨリ奉公人之所今度士列ニ取立僕と香と同ク士列ニ申付候兩人半百ニ近ク候此間ニ居候華列候し此□御座候へハ急ニ大坂再寓之儀難計候隨分辭退相成候多け□試候へ共既已諸役所其年都合ニ仕立呼出し其翌此年申付候此時ニ兎角申候へハ幾人幾場所之故障ニ相成可申類計勢其上私身ニも不測之事旁以兎角無之受申此意内貴面奈らて解不申然□大坂諸事可付け能□申度候へ共此仰も難知候年來御熟情ハ彌増ニ賴上候得共其地與人相遠候へハ覿面奉教事も遠ニ存候へハ鞭策無之舊病日長可申氣毒奉存候何卒此所御憐被下殊更小藩之□學館教授ニ申付候上ハ此心得等も御思召次第御教示被下度萬々所希御座候江戸堀之宅それく形付候然申遣候ハ見及之所等可然共御指図可被下候先ハ年始御祝詞且又近況申上度草々萬付永日候頓首

正月晦

有尊閣令郎候可然御傳被下候尊□仍舊御健飯奉察候米坊候も御序可然多のミ上候是亦御教字奉希候何分上坂之節□□可申承候扨又御序も御座候ハヽ外舅篠田方光景御點檢可下候老□□氣毒千萬奉存候何卒可然御慰諭被下多ク奉賴候御近著御録示被下度候是元新參候勤向奔走御察可被下候其上新規之學館等ニ候故萬事申試奈ト稱し多用□□可被下候

中井善太様　　賴弥太郎

賴山陽翁の名天下之を知らざるものなし而して翁の傳を記するもの江木戞氏の行狀及近世先哲叢談をはじめ世間其書極めて多し今又贅せず朝廷前きに翁の著書大に維新を賛助したるの功あるを賞し贈るに正四位をもつてせり左の一簡は翁弱冠其家を出亡せしとき翁の叔父賴杏坪翁痛く之を憂慮し其族篠田某に寄せ翁の蹤迹を追索せしめしものにしていと珍らしきものなれバ茲に遺聞に収めり一見以て翁が少壯の時の行爲如何を窺ふに足らん

古屋船便一書啓上仕候久々呈書も不仕御疎遠に打過候秋寒の處尊堂益御多祥奉欣慰候然は久太郎（山陽翁）義近年兎角放縦に有之候處當年家兄留守中浪遊に耽り候故親戚朋友切諫懇諭も仕候得共不相改當月五日竹原大叔父病死仕候に付爲吊禮家来添差遣候處途中より逐電仕候家来罷歸り私共も早速に聞き竹原よりも追手差出候へ共既に時日も經候事故今以尋得不申哉今日迄樣子相知不申藝藩封内より備後福山領へ出で候迄は相分り申候左候へば何分洛攝間に潜匿候こと丶被察候此間中井御親子に書狀にて此義申遣候貴家へ別紙御報可仕の處あまり差急候て不及其儀中井へ傳語賴遣候へは御聞可被下と奉存候藝藩の法嫡子出奔仕候へば甚だ落度に相成事に御座候其上狂漢の事に御座候へバ如何なる事仕出し申可も難計宗家一子の處も有之公私共に難捨置尋得て連歸不申候ては相濟不申候何卒御手がゝりも有之蹤迹相分り御座候はゝ中井御親子へ御相談被成候て可然御取計可被下候本人義素より別に刑憲を犯し遁去樣の儀は毛頭無之但豪俠狂妄の所爲にて御座候然し狂妄なりに宿志も有之事と相見候へば當分必ず潜居候て追手を忍可申若し御見當り卒爾に御留置被成候はゞ必ず亦逸居可仕候間御見當りの事も御座候はゞ隨分御談合にて御周詳御取計奉嘱候誠に弊家存亡の所係に御座候へば費用は何程入りても不苦候間御手厚に御取計可被下候恐惶謹言九月十九日賴萬四郎

篠田剛藏貴下

尚々家嫂も驚き心痛の至りに候處傍より色々慰置候江戸へは不申送り何分尋得候上にて申遣度候

※「釜田注」「賴山陽翁の名」より「申遣度候」までの文は、新聞記事の切り抜きと思われ、書中に貼り付けてある。切抜上部欄外には「年一月十二日　火曜日　第六千三」とあり、切り抜きの出自を窺わせるが、詳細は未詳。

竹山中井氏

竹山中井氏。名積善。字子慶。大坂人。少與弟履軒俱師五井蘭洲。相與講貫切劘。竹山豪邁卓犖。容狀瑰傑。與人相接。襟懷伉爽。談笑豁如。間雜諧謔。毫無腐儒拘攣體。一日酒間戲語客曰豪富鴻池。執贄為弟子。角觝者谷風。亦出入吾家。我與此二人。其品雖殊均是天下第一流。試寫作三幅畫何如。嘗寓江都。與澁井太室。細井平洲。井上大湫、井上四明。締交相歡。壎篪唱和。世目曰五星。以井星音近也。竹山多覽旁通。貫綜今昔。而治經精密詩文雄渾。為世所推。其為人也。謀事周備。有幹蠱之才。故有膽張氣傲之態。而不害為好人也。閣老松平侯。嘗巡視大坂。厚禮引見。命講經義。諮詢機務。竹山退譔草茅危言。以献。侯欲拔擢充昌平學校職。而竹山無意青紫。退甘韋布。以育才講道為至樂。厥語薩肥二藩皆重禄聘之。並不應。初父甃庵。創興懷德書院。三宅石庵。五井蘭洲。及石庵子春樓。相繼為院長。竹山代春樓教授。大振飾學政。竹山雅好述作。網羅開国事蹟。譔逸史十有二卷。不啻文辞雅健而簡潔。其議論凱切。實為百世亀鑑矣。松平侯既為首輔。以矯風教厚教化自任。於是栗山。精里。二洲相踵釋褐。而獨竹山不出。侯亦知其不可羅致不敢徵也。其道德巍然。標映人倫。固一世泰斗。非全儕可得而品藻其文詩也焉。

右南海文學大八號大沼湖雲手録藝苑別史所載。

竹山履軒ノ性質ハ全ク相反シ、竹山ハ端嚴ニシテ、履軒ハ豪放ナリ。壯年ノ頃、相携ヘテ播州龍野ノ舊里ニ赴キタルコトアリ、竹山ハ親戚ト面會シテ。縷々久闊ノ情ヲ陳ブルニ履軒ハ背後ニアリテ、其煩ニ堪ヘズ、阿兄何ゾ喋々タルト獨語シタリト云フ。性格此クノ如ク相異リト雖、其壎篪和合スルコト、常情ニ倍シタリト云フ。寒泉談片

竹山ハ父甥菴ノ遺風ヲ承ケテ、孝子順孫ヲ愛撫敬重セシコト、精金美玉ノ如シ。嘗テ鈴鹿ノ孝子萬吉ガ懷德堂ニ来タリタル時ハ、之ヲ講堂ニ引キ、生徒ヲ聚メテ會見セシメ、席上饅頭ヲ盤上ニ盛リ、萬吉ヲシテ手ヅカラ諸生ニ頒タシメタリ。又稻垣淺之丞純孝記録ニ附記シテ、其孝狀ヲ表章シ、或ハ西岡ノ孝子義兵衛ヲ助ケ、或ハ龍野ノ孝婦さんノ為ニ貞婦記録ヲ作リテ、知音ノ人々ニ救助ヲ乞ヒ、或ハ豊後杵築ノ孝女初ガ手織ノ木綿ニテ孝女初手製ノ字ヲ染メ抜キタル手拭ヲ製シタルコトモアリテ、家ニ殘レリ、人々ニ頒チタルモノヽ一ナルベシ。

幕政ノ盛ナル時代ニハ、江戸ノ者ハ兎角將軍家ノ贔屓ヲ為シ、京都ノ者ハ朝廷ノ贔屓ヲ為スト云フ傾ガアリシニ付キテ、竹山ハ予ハ中間ノ地ニアルガ故ニ、自カラ中立ノ意見ヲ持スト語レリ、或ハ江戸ノ者ハ德川家ヲ以テ誇ト為シ、大阪ノ者ハ豐臣氏ヲ以テ誇ル、予ハ大阪ニアリト雖、何ニモ偏セズト言ヒタリ、ト寒泉翁ヨリ聞ケリ。斯クニ様ニ記憶シテイヅレナリシカ判斷ツカズ。

竹山一日駕ニテ外出セシニ、雷鳴スサマジク起リタレバ、駕丁之ヲ懼レテ、暫ク避ケントセシニ、竹山聽サズ、「予ハ未嘗テ雷電ニ撃タレテ死ヌヤウナ悪事ヲ為シタルコトナケレバ、少シモ懼ルル所ナシ、カマハズニ遣レ」と命ジタレバ、遂ニ雷雨ヲ冒シテ進行シタリトゾ。寒泉談片

懷德堂ニテハ、漢文ノ訓讀ニステ假名ノ繁冗ナルハ、文ヲ属スルニ害アリトテ、勉メテ簡約ヲ旨トセリ。一齋点モ之ニ基ヅキタリト云フ。然ルニ竹山訓點ノ四書五經ハ家ニ存セズ、竹山ヨリ石窗ニ、石窗ヨリ寒泉ニ傳ハリテ、益簡約ニナリタル者ガ懷德堂讀法トシテ受業門下生ノ間ニ活傳セラルルノミ。其印シテ世ニ行ハルルモノハ、國讀刪正ト題スル小學アルノミナリ。

竹山ノ和文ハ極めて少シ、家ニハ草稿ヲ留メザレドモ、世ニ行ハルル者ニ吉原物語アリ、未刊ノ書ニハ龍野貞婦記録一巻アリ。和歌モ十餘首バカリノ詠草ガ殘レリ、竹里翁ノ加筆セラレタルモアリ。竹山ハ、和歌和文ハ多ク竹里翁ノ教ヲ受ケラレ、其代ニ漢詩漢文ハ竹里翁ガ竹山ニ示教ヲ乞ハレタリト、寒泉翁ヨリ聞ケリ。竹山ノ和歌一二ヲ左ニ録ス。

立春

ひかしより介さ立初とから人もわ可の本能春を仰可む

第二句介さ立そむるとあ里多く候改め可多く竹里評

霞

海山もわ可ぬ霞能衣手盤神代乃春尓可へすとやミん

竹山ノ蒙養篇ハ候文ニテ童蒙ニタヤスク倫常ノ道ヲ悟ラシメン為ニデキタルモノナリ、サレバ懐徳堂ニテハ、童子ニ簡易讀本トシテ熟誦セシメタリ。草稿ニハ貧陰消息ト題シタレドモ、後ニ蒙養篇ト改称セラレタリ。

竹山隠居ノ後ハ、常ニ縫掖ノ衣ヲ服シタリ、早野氏舊蔵ノ肖像ハ、即其服装ナリ。非常ニ寛闊長大ナル緑色ノ縫掖ガ殘リ居タルヲ覺ユ。今ハ散亡セリ。

竹山ノ頭髪ハ総髪ナリシ由。

在津記事ニ、健啖豪飲、亦無匹敵、ト記シタル如ク、初會宴游ノ節ナドニハ、膳ヲ杯ニ易ヘテ飲ミタルコトアリ、然レドモ更ニ亂醉ニ及バズ、態度端嚴ニシテ、平生ト異ナルコトナカリキト云フ。蕉園ガ正月ノ初會前ニ弟石窗ニ送リタル俗牘中ニ、父ガ席上飲食ノ過度ナルヲ氣ヅカヒテ、諫言ヲ勧メタルモノアリ、至情ノ藹然タルヲ見ル。竹山ノ飯碗ハ並河氏ノ遺物中ニアリ、井鉢ホドノ大サアリ。

竹山ノ嗜好ハ植物性ノモノニテハ、土筆及萱草ナリ。故ニ二月五日ノ祭典ニハ、土筆ヲ薦ムルヲ例トセリ。又煙草ヲモ嗜ミタル由ニテ、襄事録襲斂ノ條ニ、煙草嚢、煙管陶器ノ目アリ、附記シテ、右二品、生前御好嗜ノ物故、新趣意ニテ加之トアリ。

並河寒泉翁ハ、毎年竹山ノ忌日ナル二月五日ニハ、其藏スル所ノ竹山講座ノ像ヲ懐徳堂西夾ノ壁間ニ掲ゲテ茶菓ヲ奠ヘ、門弟子ヲ集メテ、竹山ノ逸事ヲ聞カスルヲ例トセラレタリ。上述ノ諸件ハ多クハ其席上ニテ聞キタル話ナリ。

先年中井敬所翁ヲ不忍池畔ノ菌舊居ニ訪ヒタル時、翁ハ其所藏ナル篠本為直筆記自寛政六甲寅至嘉永元戊申ヲ示サレタルガ、其中ニ左ノ記事アリ、今併セテ之ヲ載ス。

肥後學館祭酒　高本敬藏

竹山より十二月賜りし書ニ右敬藏儒士之事天晴之才力藪孤山之外ハ先此人と聞えて温厚豈第之人品先祖は韓人尓て李姓の由左候得は五族之内と相聞えて加藤氏俘囚之内ニて殘り候人之由本邦尓て室家を保ち候事尓て其子出身父ハ高麗母は日本と申事尓て姓越高本と賜候由緒の候べく候其藩中之人噂候よし珍敷家筋

辛嶋才藏

是も傑出の才子唯々江戸藩邸ニ居られ候

竹山子當時家督　中井淵藏

積善子慶號竹山　中井漢翁

又雪翁とも書

竹山ノ高足ニ池上梅岸アリ、（墓所ハ一心寺）。大阪道修町ノ藥舗ニ福島屋吉兵衛ト云フ人アリシハ、其子孫ナル由。池上氏ニ梅岸詩巻アリ、並河寒泉翁嘗テ森三壽氏ノ紹介ニヨリテ借覧セラレシガ、並河氏ヨリ返還ノ後ハ、久シク森氏ニ留メ置カレシニ、其中ニ吉兵衛没シテ、アト絶エタレバ、其マヽ森氏ニ預リオカレシガ、森訥三壽ノ子氏在世中、其處分方ニ當惑致シ居ラレタリ。

右ハ明治三十六年九月二日森訥氏手簡ニ見ユ。

大阪長堀富田屋楠南詰ニ雜喉三ト云フ者アリ、嘗テ家ニ紛議アリ、深更門ヲ叩キテ、竹山ニ裁ヲ乞ヒタリ。雜喉三ハ素封家ナリシガ、今ハ斷絶セリ。

右ハ明治三十八年二月五日森訥氏手簡ニ見ユ。

竹山ノ作ナリト聞ケル擬風體ノ狂詩一篇アリ、左ニ録ス。

蝶々于飛、止于菜葉、我客至矣、新田之邑、
其肴維何、有菊玉子、維蒲之鉾、有艸其皮、
其酒鬼殺、其間発兮、其汁大根葉、其煮韮兮、
薄言奏田樂、有芬木芽臭、客人頓首、鹽梅好矣、匪鹽梅則好、挨拶之道、
蝶々四章、三章章四句、一章六句、

竹山自筆門人録

舊門下

大村彦二郎
〻並河瑛輔
〻渡邊貫藏
並河右衛門志
〻上田理兵衛
〻大田深造
大田鼎三

舊識入門之分

貫藏同屋越前屋與三衛門
並河寄宿與右衛門
大田寄宿洲崎禮介
上田姊之子中村元冲

新入門之分

大田縁者河野養元

大田妻之■河野右衛門大尉

高槻家中北岡養軒（大田寄宿生）

大田妻之■西岡縫殿□〻□

丸亀町人大田門人田中賢治

○書院藏本大日本史寫手

三宅正誼	中井積善	中井積德	加藤景範
小柳克明	源文蔚	川上重教	古林相如
谷川方至	奥崎庸行	早野辨之	岡信之
鈴木文鱗	足立衛	簑島正常	藤好章
小林義方	福島崇	松尾時中	早維祺
原與隣	鈴木裕	竹島久道	中村有則
福田以文	秦思齋	廣崎子胤	谷德本
大江周行	辻本弸中	阿部貞良	岡林為光
村上豐章	田中遜之	金崎元永	盛高馬城
西原良菴	共三十七人		

右　校正者

三宅正誼	中井積善	中井積德	加藤景範

○懷德辛丑壽卷所載

中村有則	横谷友直	木德　輔	谷川方至
林　普	播磨藤江維孝	教下生 醒泉宮弸	古林尚剛
古林尚柔	桑名克一	中井曽弘	門人龍埜 股資原
■■■源文蔚	鹿德明	喬	福田以文

古林端　叔則　君家保武　高安芳文
藤田喜　中井曽縮以上詩文　加藤景範　元猷
敦善　益庵　宣喬以上和歌

○懐徳堂壽宴巻所載

賴惟寛　今井重憲　中村有則　岡林為光
早辨之　宮弼

○渾沌諸彦錢叔寶樂志図引帖所載

葛張　田章　賴惟寛　筱應道

○諸家名號

コレハ諸幅或ハ屏風ノ詩文ノ作者ヲ記シタルモノナルベシ

第一幅

源乘祐　松平和泉侯大阪府帥
出羽守紀正邦　別見　萬　別見
源義根　字子寛号　称右門足利氏今氏田村
阿州平島舘主世呼為阿波公方
重敎　字習之号東陵称九郎右衛門川上氏大阪人
國光　字子謙号龍窟称順大夫國枝氏龍野儒臣
平瀬虔　号六甲称弥左衛門大阪人
渋井孝德　別見

第二幅

益良　東坊城大宰大貳
養齋　名盈枚称吉兵衛晩号可久吉田氏大坂人
子祥　蘭洲五井先生
金谷　小柳正殷名良弼長寄人
遠山近江守　名友隨濃州苗木城主

岡元鳳　字公翼号慈菴大坂人
股野充美　字才介号玉川龍野儒臣

第三幅

渋井大納言公麗卿
有則　別見
藪勲　別見
片猷　別見

第四幅

赤崎貞幹　字彦誠号海門称源助薩侯儒臣
隆秀　稲垣子華号瀧下散人称淺之丞作國人
菅晋帥　字禮卿称太仲備中人

第四幅

河田孝成　号東岡称八助因藩武臣字子行
仲父　中井伯元名信之号鳳岡龍野醫員
三宅光同　字子淵称新二郎春樓義子
葛張　橋本貞元字子琴号蠢菴大坂人
辨之　早野永輔字士譽号仰齋又号淡水
賴惟柔　字千祺称万四郎萩藩儒臣
柏嵓　妙心寺中隣華院主

又第四幅

菅原世長　別見
源義張　字琴主島津氏称左馬助平島舘主賓客
藤江致遠　字子任号龍山称軍治龍野儒臣
大城燠　字文卿号壷梁称多十郎肥後儒臣
萱来章　字君誉号錢塘称司馬太肥後阪邸處守
呂實夫　字元丈野呂氏江都官医

宮常之進　名奇字子常号筠圃京師人

第五幅

賴惟寛　別見

靜窩　道明宗助

山濟　字公威号良川山邊氏堀田豊前侯医員

蛻嵓　名邦美字景鷺称才右衛門梁田氏赤石儒臣

安達直右衛門　別見

松尾維則　字玄通龍野医員

又第五幅

人見恭　字子魚号壽亭称弥右衛門尾藩臣

渋井孝德　字子章号大室称平左衛門佐倉侯儒臣京師人

江村綬　字君錫号北海称傳左衛門京師人

平九齡　字壽王号　称官兵衛大畠氏赤石阪邸處守

惟寛　姓賴字千秋号春水称藩儒臣

有則　中村長二郎字君彝号両峯平野人

長玄珠　称源五兵衛長窪氏字子玉赤水水戸儒臣

第六幅

東溪源敏　字子求東溪其号称新助松平氏亀山大夫

正誼　字子和号春樓称才二郎三宅氏

元鳳　別見

関月　名德基字阮二蔀氏大阪画工

葛張　別見

井潛　別見

○文恵先生襄事録抄

右ハ後便ニ送ルベシ

懐徳堂水哉館先哲遺事巻二

學校再興ニ關スル書類

○關東下向ノ手簡

一筆啓上仕候。盛暑之節御座候得共、各様益御勇健可被成御座候。珍重之儀ニ奉存候。然ハ當表先月十七日大火之義。追々御聞取可被成候。右ニ付當學校モ類燒仕リ、私儀始家内長幼ハ無別事、一族共方へ立退罷在候。右燒地假屋ハ早々掛可申候得共、學校再興之義ハ所詮力ニ及不申候。尤建立以来、始テ之類燒ニテ前例トテモ無御座候へハ、以来之義如何可仕哉、右ニ付何角内々奉伺度奉存候事御座候故、何分罷下リ各様迄可申上候乍、御面倒其節委曲御聞調被下度奉頼上候。

一　今般下向仕候主意之所、一通リ不申上候テハ各様思食之處モ如何ニ奉存候故、別紙ヲ以荒増之所各様ま天申上候。類燒後混雑中、急ニ取調へ申候事故、文段等分リ兼候義モ可有御座候。可然御推覧之上、大意之處御承知被成被置被下度奉存候。尚面上を得候ハハ、逐一可奉申上候。

一　右ニ付各様迄一應之様子モ不申上推テ罷下リ候義ハ餘リ卒爾ノ義恐多奉存候故、先書中を以此段申上候下向之義ハ、何卒御許容被下度候。一日も早ク出立仕度本意ニ御座候へとも、何分假屋を掛ヶ、家内引移シ申候義乍内分差掛リ候事に御座候得は、此義相濟次第出立可仕候、僅之土木之義ニハ御座候へとも、格別之大火、諸豪家燒落申候事故、諸工人拂底手廻リ不申心ならず、手間取可申候。大氐月末或ハ七月差入之比出立仕候様ニ相成可申候。左様御聞置被下度候。

一　御繁用御公務之御中故、是等之瑣事迄ハ尊答被下御暇も有御座間布哉と奉察候得は近比楚忽恐多候得とも尊答相待不申用意出来次第出立仕候義も可有御座候。不敬之段ハ幾重ニも御用捨可被下候乍、去萬一少々御閑假も御座候ハハ事之成否ハ格別之義下向と申迄之義ハ各様御承知被置下候て出立迄之内ちよと御一紙被仰下候ハハ別而忝奉存義道中も安心ニ而通行可仕候へとも是ハ猥リニ所希ニハ無御座候。唯々萬々奉期拝面候様に仕度、右可申上、如此御座候。恐惶謹言

六月三日　　中井善太

積善

吉村又市様

長尾諫見様

水野清左衛門様

大津多丹治様

尚々今般以外之大火絶言語候。升屋平左衛門、鴻池善右衛門も皆々類焼仕候。此義ハ定而最早御承知可被成候へトモ、乍序申上候。升屋ハ殊ニ急火ニ而、土藏之外ハ全ク丸焼、家内身すがら立退候程之義、別而氣之毒之義ニ御座候。以上。

○口上書

是ハ學校焼落候節早々、澁井半七を以御城代様へ奉伺候口上書。其後別紙口上伺書改而差出申候。

此度學校類焼仕候ニ付、同志門人共申合再興仕度所存ニ御座候得共、右重立候もの共、不殘類焼仕再興之儀力ニ及不申候。聊之手當銀を以纔之假屋を建住居仕候程之儀は可成ニ相辨可申候得共、最早學校と唱申候程之儀は決而出来不申、此儀之□□兼而愚意ニ存寄罷在候儀は於大坂公儀之學校御建被遊聖堂之設ニ仲之釋菜被執行四方之學者モ相集リ貧學英才之者共養育有之度ものニ御座候共場所は場末ニ而ハ詮も無之、船場之内東北之方角抔可然町並四拾間四方之屋敷御買上ニ而被仰付度事之様ニも奉存罷在候。然處今般大変ニ付、學校四面も焼地ニ相成候へハ、此場所御買上と申候得は御費も輕キ方私拜領地と一所ニ學校御取建も被遊候ハ々新成御設とハ格別ニ手輕ニも相濟可申若私拜領地間ニ狭り如何敷儀ニも御座候ハ々、右地面を差上可申候。元来亡父願受候本意、永久ニ相傳度而已之儀、永ク子孫ニ譲り候抔と之、一分之私計ニ無之候得は万一右ノ通相成候得は誠永久之儀於私も千萬難有可奉存候。彌右之通相成候ハ々、江戸表より儒臣御役人中抔御差遣御取計可被遊候私儀は下地之假屋ニ住居仕御用之端をも相務候ハ々本望之至ニ可奉存候、右之段不苦候ハ々江戸表に罷下越中守様御役人中迄相伺申度候。尤右焼地ニ付候而之存寄ニ御座候へハ事延々ニ相成候而近辺普請も追々出来立可申左候而者手抜ニも相成殘心之儀ニも奉存候へハ急々右之段内々奉伺候。以上。

五月

○口上奉申上候覺

一　今般奉伺候學校再興之儀ハ大小輕重とも何れ可然筋に御聞取被為遊候様に御座候とも何分公儀御費用に相成候御儀近來御節儉之筋專ラ被為　御出候御時節ニ相應不仕候所是のミ如何被為　思食候御儀も可有御座候哉。且又先日差上候書付之末ニ申上候　公儀御學校之儀ハ、若被仰付候ハ々、天下國家之御光とも相成、關西諸國を振立可申儀に御座候へは、重疊之儀ニ被為　思召候御事ニ可有御座候歟ニ候へとも何分　官費格別御大造之御事故、此義第一ニ相支リ可成と恐察仕候。最初より是等之義をも相考不申楚忽ニ申立候義にてハ無之候。是ニハ折入候愚意有之。差而官費に相成不申候て　御大造之御設ヶ随分御辨じ可被遊趣を内々存寄罷在候故、試に内密申上度奉存候勿論此一件ハ全く　公儀之御為を奉存候義私身分にかゝり候事にてハ曾而無之候へハ此義ニ遠慮仕候筋ハ無之候へとも乍去私式匹夫之身分にて打越候儀甚以奉恐入候故、此義ハ最初より差扣へ罷在候定而間

違候愚意にて　御用ニ相立候事ハ無覚束候得共もしや如何様に存寄候義にやと古之聖代ニ芻蕘之言をも御取用被遊候　思召等にて御手前様を以　御内々御尋も御座候ハヽ罷出逐一可奉上候もし又万々一冥加に叶ひ先年之如く被　召出　御直に御下問も可被遊候ハヽ、千々万々恐惶至極仕候へとも何卒内密言上も仕度奉存候へとも此段ハ餘り恐多く猥りニ庶幾仕候義にハ無御座候何分肺腑を不殘傾寫仕度奉存候ニ付、右之段奉伺尤此愚意ニ於而ハ書付を以申上候義ハ幾重ニも御赦免被成下度奉願候、以上。

子八月　　中井善太

水野理兵衛様

○西寺社役人御尋書

かしこ。本文日限之義、別紙ニ書付又印被致早々御差越可有之候。以上。

其日元去子五月類焼之後江戸表江被罷下越中守殿江願書被差出候者何月幾日ニ而其筋江可願出旨御役人より被仰渡候者何月幾日ニ御成此儀急ニ被相尋候間呼々進候而も間取候故以書中申入候相分り候事ニ候ハヽ以書面御答可有之候。若入得候事ニ候ハヽ只今早々御役所へ御出御様存候。以上。

九月十八日　　西寺社方役人

中井善太殿

答事

○御尋之申上候

御尋之趣申上候

一　當學校去子年類焼仕候已後、同八月江戸御表へ下向仕リ同十二日

越中守様に罷出、御用人水野理兵衛殿へ、右學校再興之義、愚意之趣奉伺候旨委細演説仕候所、其趣逐一之書付を以相伺候様との御事尓天、右伺書取調候、同月十六日罷出御用人日下部武右衛門殿へ差出し候。同廿四日御用人吉村又市殿畑惣右衛門殿より手紙にて今日中罷出候様との義にて參上仕候へハ惣右衛門殿より被相伺候旨相手濟候間大坂表江罷歸、

町御奉行所へ此通り表立而願出可申候。その御旨被仰渡候。

右ノ通相違無御座候、以上。

丑九月十八日　　學校預リ

中井善太印

○口上奉申上候覺

一　舊臘廿三日被　召出學校再建之義、去ル丑三月格別減省之積リ書被　仰付同四月右之書付差上候得共尚又今般嚴敷減し方を付候て重而可申上旨被仰渡奉畏候。仍而追々取調へ仕り先達差上候繪図之内成丈省略を付勝手向ハ假屋之侭直し相用候を第一之減し方に仕り右之繪図并ニ積リ書等別紙ニ差上申候。假屋之義ハ類燒後早々當分之凌迄ニ用意仕候事故、最初ハ輕く建直し申度其繪図を差上候處、此度右假家を其侭相用度候、建繼修覆等仕候テ別紙積り之通りニ御座候。尤大積り之内惣而襖障子疊等ハ追々如何樣ニモ取繕仕度奉存候ニ付、右之分ハ相省キ申候而別紙之高に御座候。左候へハ建物一式公恩を以皆出来再興ニ相成申候。何卒右之通被為　御付被下候ハ々本望無此上重疊難有可奉存候、以上。

寅二月　　中井善太

○學校再建御聞届書

尼崎町壹丁目
中井善太

其方申立候學校舍再建願之儀、父忠藏儀享保年中願之上學問所之地除地ニ被成下候節往々修復料等も手當無之ニ付、永續助成ニ可相成候為地續にて百坪程町屋鋪をも是又除地ニ被成下候儀ニ付、則相續之御手當ニ候得者、今度致類燒候、迚御手當可被下筋ニ無之候得共年久敷致相續來候もの之儀にも候間此度ハ為御手當金三百兩被下候享保起立之訳心得遠不申元地ニ而如何樣ニも學問所取鋪理享保之度被下置候添地之方者往々相續之助成ニいたし置可申候勿論此以後類燒等之節も御手當可有之節トは存門鋪旨江戸表より御下知よつて申渡候間難有可存候。

七月

寛政七年乙卯七月六日學校再建願御聞届
江戸より御下知御年當金三百兩被下置候節西御奉行
松平石見守殿より被仰渡候御書付壹通

右竹山手書包紙ノ寫

○口上

今般學校再建仕候ニ付表通り拾弐間之分右普請之間板囲仕度奉存御聞届被為下候樣尓奉願候、以上。

卯七月廿三日

○口上

一　學校再建ニ付去卯年七月御願申上表通り板囲仕候所追々普請も出来立候故、今日右板囲取拂可申候仍而右之段御届申上候以上。

辰二月　　中井善太印

右ノ外學問所再建ニ關スル書類三通懐徳堂記録拾遺ニ載ス

學校公務文書

○覺

一　尼ヶ崎町壹丁目學問所之義享保十一年四月亡父忠藏御願申上同六月七日願之通被為　聞召届右之場所除地諸役御免許ニ被為　仰付候旨兩御奉行鈴木飛彈守樣松平日向守樣被仰渡候其已来忠藏學問所預りと申にて兩御番所年頭ハ朔御禮寒暑中之伺御奉行樣御交代御初入御歡等相務申候。寶暦八年忠藏相果私儀家督相續仕り則學問所預り相務候段其節追々御届申上先例之通り此節迄相務来候尤年頭御禮ハ正月二日諸家留守居申と御城入醫師衆との間口罷出候ハ朔御禮ハ七月廿日過晦日迄之内勝手ニ罷出大方ハ廿八日に相務候御初入之節ハ御家老中迄右御歡申上直に御逢被下候義も有之。又ハ御家老中迄申置罷歸リ其後年頭ハ朔等之御序ニ御目通り仕候義も御座候。近年ハ大方御家老中迄申置候、其外臨時罷出候義皆々御家老中迄懸御目候義常式にて隨身御用等にて被召義も御家老中より御手紙にて被仰下罷出候諸事ノ務一切中之口より出入仕候品により表立候御届申上候義にてハ御當番所へ罷出候義も御座候。私代ニ相成候て御初入之節相務申候例ハ、鵜殿出雲守樣寶暦十二年六月之御到着にて同七月四日罷出、曲淵甲斐守樣明和三年三月之御到着にて同四月五日罷出、室賀山城守樣同五年七月之御到着にて同月廿日罷出、神谷大和守樣同六年十二月之御到着にて同月十五日罷出、何れも先規之通り御歡申上候義に御座候。右之通り相違無御座候、以上。

安永四年六月　　中井善太

別紙

一御初入之節ハ三本入扇子臺、年頭八朔并ニ御交代之節ハ、御肴代銀子壹封持參仕候。寒暑之伺ハ、國元之茶一袋手紙を以御家老中迄差出置候。以後一兩日之内罷出申候義御座候、以上。

六月　　中井善太

○

亡父忠藏義ハ儒者三宅石菴弟子尓て仕置候。享保九年辰年大坂大火之後、石菴弟子共打對則弟子之内尼ヶ崎町壹丁目道明寺屋吉左衛門所持同所之屋敷表口六間内裏行貳拾門之燒跡ニ石菴住居被繕ひ置候所、同十一午年右之場所ニ兩隣助松屋茂兵衛尼崎屋市右衛門屋敷地之内一方差加へ學問所ニ取立度旨、同四月ニ東御番所へ忠藏願出候處、同六月七日兩御奉行鈴木飛彈守樣松平日向守樣御前へ忠藏被召出江戸御伺願之通就被為聞召届町役御免除地ニ付仰付候。問學問所之取立末之無退轉可相勤候。且又右二願之屋敷重而代地被下候迄ハ屋敷主人相對可仕候。但し兩隣之内いつ連之屋敷成共忠藏相對仕り可申出候。其上尓て屋敷主人可被仰後その旨御書付を以被仰渡候則東隣尼崎屋市右衛門屋敷地表口五間裏口二十間之所相對仕り申出候ニ付右之趣兩屋敷主人被仰渡候。其後御代地之義暫く御沙汰無御座候。同十五戊年八月十八日兩御奉行松平日向守樣稲垣淡路守樣御前へ忠藏被召出代地之儀相應之所無之間道頓堀御預ヶ地之内可被下置候併所柄悪敷候へハ請取候て可為難儀間右預り之者共より銀子差出候樣ニ被仰付由尓て其所之町人大勢御白洲へ被召出銘々銀子差出候。總高貳拾貫目忠藏頂戴仕り罷歸り道明寺屋尼崎屋ニ願候相渡し右學問所之場所永々拜領之地ニ相成、當年迄四拾年餘無別條相續仕り難有奉存候。右學問所由来此度書付差出候樣尓との仰尓付如此御座候、已上。

明和三戊年二月十二日　　學問所預り中井善太

年寄　川井立牧殿

右は此度御當所より御尋有之候由にて惣年寄より當町年寄迄申來り候故右之通□(マヽ)メ年寄□□(マヽ)。

○願書案文捨子行倒怪我人惣ゞ學校ニ照合候事不取会樣之願文

奉願候口上覺

一　去ル三月廿四日當日八日追々御届申上候通り尼ヶ崎壹丁目除地諸役御免學問所軒下に有之候捨子取上ケ養育仕候所病死仕候付　御下知を以死骸相片付申候右は不意之義ニテ兼テ奉伺置候事も無之養掛り候義に御座候右不得止事一分に別愛始終之世話仕り相済申候少分之學問所之義以来ヶ樣之義毎々御座候ては其難澁仕候其外軒下門前に於て行倒れ者怪我人抔御座候節も如何取計らひ可仕哉。乍序奉窺候是又右之趣にてハ難澁至極之義に御座候。諸役御免地之事に御座候へハ何卒此已役惣て町方臨時之変懸り合候節迷惑不仕樣ニ被仰付被為　下度奉願候願之通り　御聞届之上可然御下知被為成下候ハゞ難有可奉存候、以上。

午五月　日　　學問所預り中井善太印

○口上書

口上書を以申上候

一　去ル三月廿四日之夜御届申上候尼ヶ崎町壹丁目諸役御免除地學問所軒下ニ捨有之候。當歳之女子、其以後養育仕罷有候所此度稲垣藤左衛門様御代官所攝州西成郡三津屋村百姓太兵衛と申者同村源七請負を以貰度申候に付差遣し度奉存候尤太兵衛女房當歳出産仕り其小児先月病死仕候に付其乳を以養育可仕段相違之義無御座候願之通被仰付候ハヽ難有可奉存候、以上。

午四月　日　　學問所預り中井善太印

○又口上書

口上書を以申上候

一　去ル三月廿四日之夜御届申上候尼ヶ崎町壹丁目諸役御免除地學問所軒下ニ捨有之候。當歳之女子、先達而御届申上候通惣身瘡氣相見へ申候故、最初より醫師古林正民治療相加へ罷有瘡氣は聊快相見へ候所急差起り候に付猶又右正民藥相用候へ共、療治不相叶、今日相果申候に付此段御届申上候　御聞届被為成下候様奉願候、以上。

五月八日　　學問所預り中井善太印

○口上覺天明元年辛丑十一月

奉伺候口上覺

一　學校之義ニ付去子年冬御願申上候品々　聞召被為届願之通被為　仰付候御砌　御觸流之義ハ其節迄ハ町内より為申聞承知仕候得共、右之已後は追々別段被　召出被仰渡候御趣ニ内々傳承仕り罷在候當丑ノ三月人別別(マヽ)証文初而相納候以来右之義早速奉伺候も恐多先差扣罷在候處最早歳末ニ及候故　御觸流之義彌右之通相心得罷在候而宜敷御座候哉之旨乍恐此度奉伺候以上

丑十一月廿四日　　學問所預り中井善太

○口上覺

奉伺候口上覺

一　去安永九子年十一月學校人別證文等之義奉願度合京極伊豫守様江相伺候所學校ハ除地無役之事故、人別ハ隨分可為別證文願立可然候。左候へハ以来御觸流之義別段ニ召出し可申聞候間此段相心得候上にて可願出候旨御直ニ被為仰聞奉畏候段御請申上御月番土屋駿河守様江右御願申上候所、同十二月品々願之通り被為仰付候其後、御觸書之義御沙汰無之候故、翌丑年駿河守様へ右御觸書之義奉伺候へハ其節伊豫守ニハ御退役佐野備後守様御新役之御砌に

付、少々御様子有之候へハ當分御觸書不承候とも差障候義も無之候ハヽ、先暫見合候様に駿河守様より御内意にて差扣罷在候内、無程駿河守様御轉役、其後改而奉伺候折も無之、其儘今日に相成申候餘リ年數經候故、此節御延行又々右奉伺候何卒最初伊豫守様被為仰聞候通りに　御下知被成下候ハヽ、難有可奉存候、以上。

六月廿四日　　中井善太印

○逸史献上記録別冊

○逸史ニ關スル書状一通

十一月八日尊書一昨七日到着忙手拝披就審

尊候眷集御安佳之状萬福至喜。淵藏様秋來時に御伏枕之所今程御爽快御内外令弥嬉遊被慰御目前候旨御來書之趣嘸被奉察候。今度御服御拝領誠ニ御多赴踵上門候段拾僕等栢悦此事尓候。惣而海内儒門之榮幸此後言語も開候事とも可申候而、以大御功績と奉存候。右ニ付愚意申上候ハ右御紋服御拝領上申事ニ付御格式定り候事と奉恐察候。公役衆ニも熨斗目着用相成候と不相來候分も御座候。右被仰越候夜着様之もの尓て綿着張滿奈子は多く弊藩なとより獻上之呉服其通之物尓て大釣甚又ハ長物定後付錠前付之類皆右呉服獻上之節に用為候事ニて候。餘外会入候地合尓て可有御座候皆　公儀呉服所尓て相調候事ニ候右御侍服者御子孫迄御着用勿論御儀上奉存候浪人之御身分尓てハ隠居當主之論ハ無之候。右御熨斗目等御着用ニハ必若黨可被召連候事申上存候。右御拝領之節ハ御禮廻り又ハ御請(ウケ)等差圖上申事兩町御奉行中より御座候。急度差圖をは無之林祭酒へ被及書狀可然奈とゝ申事□(マヽ)□□□□(マヽ)□□奈と申類□□是迄とハ莵も角も此後兩衙へ御出之節い可様ニ仕候而可然候外之段御極メ被成可然弊藩尓てハ表玄關へ公儀与力ハ刀提罷上り取次彼へ口上申入候而罷歸りしニ取次之者式臺へ下り不申是ヲ引キ付ケト唱へ申し同心ハ留守居部屋へ直尓上り申し又御旗本衆ハ先ハ御大名方同様上申ものニテ候。何分是意外ニ御例も無之事ニ候へハ別而御大切ニて候。此時今様之事御定メ置く可然候。いらぬ事ニ候へ共、愚意申進候。

一、高砂書狀遣し被下為返書進之間いつれも又御序御出し可被下候。

十月末ニ発一書候。既相遅居可申候乍御面倒御益々奉企望候時下抄冬無餘申候來歸若ニ目出度可得其上候此地餘外暖氣ニ候。何分愈歸とも可申候御自書御高要ニ存候　あなかしこ　十二月九日

中井濼翁老先生　　賴惟完侍

○文惠先生襄事録抄

享和甲子二月五日正午時終焉私諡曰文惠先生

護喪　古林温秀　並河誠輔　副　藤田九郎兵衛　早埜義三　山片平右衛門　長谷川小右衛門

司書　西島立敬　中川元吾

司貨　牧熊藏　同新三郎　同善太郎

訃告

京都之分　太田碩庵　並河丹波介　三木佐渡守　小山伊三太　大村彦太郎　革島新五郎　中原敬作

伊丹之分　大塚千太郎口達

尼崎田中純治　國分柘植中務　漁村花崎彦六　善根寺村足達重右衛門　北條村古林章甫　生駒中井周民　五條横谷東馬　龍野中井元亮　河高原文四郎

家原安達勝右衛門　池田荒木善右衛門　住吉小倉關藏　同神奴將監

其外遠方之分追而為相知申候事

諸屋殿方切紙申達候事、町家懇意之方回狀順達、同志親類分者御大切之砌使者ニ而召集申候事。

町内年寄川井氏へ即日口上ヲ以相達申候事。

大斂　古林温秀　并河誠輔　田中純次　中川元吾　石野充藏　早野義三　関平　佐兵衛

棺蓋　文　丸川茂延　書　早野正巳

帳場誓願寺門前

布施庄左衛門手代　尼崎屋七右衛門手代　伊勢屋殿四郎手代　播磨屋与市手代　播磨屋九兵衛手代　福鴻屋吉兵衛手代　同家僕壹人

右帳場一切福吉引請

應接者

升平手代弐人　千草屋新三郎　又手代壹人

右休息所一式升平引受

行列

奉行門内繰出し　長谷川小右衛門門外見繕　中井要藏　同田邊屋仁右衛門

先拂　羽織一刀　麻上下半股立鞋　侍屋喜八

治兵衛　侍屋伊右衛門　麻上下半股立鞋

塾生　同荒木敬治　同角田才治郎

同佐藤雍藏　同奥村弥二郎

墓標　同杉山庄兵衛

羽織一刀　太右衛門
同渡邊貫藏　看板　與夫　太工　八人　利兵衛　同草履取　關平　竹杖股立

柩　看板
同石野十藏　與夫　八人　麻上下一刀薦草履　早野義三　同几杖持　半介　同挟箱持　善助　爽服鞋　七郎

麻上下股立鞋　抱手　幸助
若黨　清兵衛　同小一郎　若黨　同正藏　草履取　藤兵衛　熨斗目十徳　温秀　若黨　同庄兵衛
看板一刀鞋　熨斗目麻上下股立草履　紙治ノ男
草履取　傳八　雄右衛門　若黨　同安兵衛　草履取　甚兵衛　同誠輔　若黨　同弥助

帛紗麻上下一刀
草履取　同善助　幸藏　草履取　同甚治郎　熨斗目麻上下　左衛門志　若黨　同喜助
帛紗十徳
草履取　同藤八　秀藏　若黨　喜兵衛　草履取　同清八　帛紗麻上下　深造　若黨　同吉藏

革島新五郎名代
草履取　利助　帛紗麻上下　三郎兵衛　草履取　紙治ノ男　傳兵衛　熨斗目麻上下　正平　若黨　鎗持
草履取　太吉　草履取　挟箱持

北所ニテ行列少シ切ル　三四間欠ケル　○

帛紗麻上下一刀股立　同　同　同
同志　山本宗太郎　藤田九郎兵衛　加藤源助　長谷川小右衛門
帛紗麻上下一刀股立　同　同　同
金崎市右衛門　金崎七右衛門　山片平右衛門　黒田孫太郎

小川屋ノ
塾生供　利兵衛　同志供　笠籠尼市ノ男　丸川一郎　若黨　鎗持
小川屋ノ
同　金兵衛　同　両人　草履取　挟箱持

田中順治　若黨　鎗持
草履取　挟箱持　以上　宜輿二　七郎　温秀

焼香列

中井七郎　中井雄右衛門　并河小一郎（當日病氣不在）　長島肇
革島新五郎（幼少ニ付名代内ニ燒香ス）　并河誠輔　古林温秀　篠田剛藏
長島正平　太田新藏　古林秀藏　早野義藏

以上　但シ同志塾生其外門下之輩都而内ニ而燒香ス出棺前玄關へ張紙し寺ニ而之燒香相断候事
門人中燒香寺ニ而者混雑可仕候間此所ニ而御燒香可被成候

禮場寺内

七郎　雄右衛門　小一郎　秀藏

留守人

履軒先生　淡輪元潜　岡橋丈輔　西島立敬

玄關番

岡田直藏

家内惣世話

田邊屋仁右衛門　同爲五郎（下之分文助　はり滿や佐助）
惣八（料理方）　大忠　八百弥

寺ニ而世話方

山西宗五郎　上村屋幸助
一　紀國屋六左衛門　神嵜屋清助

右兩人九日朝ヨリ来リ寺之見繕墓所見分等相願申候事

歸後夜食可出人數

親類同志別懇之内并遠方會葬之人

右同志中者遠方トテモ狂而一同被歸樣申候事

帳場之人　休息所應接之人　借リ人　雇ヒ人

凡百五十人

竹山葬儀ノ時ハ、送列數町ニ亘リ、槍林ノ如ク立チナラビテ、壯觀ヲ極メタリト、寒泉翁ノ話ニ聞キ居タレド、裏事録ノ送列ニ槍數ノサマデ多カラヌハ如何ニヤ。コヽニハ親戚門生同志ノミノ行列ヲ記シテ、其他ヲ略シタルニヤアラン。

○竹山門下ノ高足

脇愚山名長之字子善

丸川松陰名茂延字千秋

佐藤一齋名坦字大道

早野仰齋名辨之字士馨又號淡水

原蓮峯名存之字子希

中村兩峯名有則字君彝

早野橘隧名正巳字子發

池上梅岸

瀧蘇亭名榮字守恭晩号松隠

橘隧先生墓誌　石窗撰

先生諱正巳、字子發、早野氏、稱義三、小字三太郎、號橘隧、一號反求、考諱辨之、號仰齋、先生有學行、家大坂堀江教授、徙杉山氏、先生幼喪父、尋罹火、遷于燕土港、單貧益窮、所賴有土藩數口之饋已、受學於竹山履軒二先生、及長、賢而有文、旁能書札、歸住堀江、下帷講習、生徒麕至、家聲大振、沼田侯聞賢聘之、不就、辭以名在土藩、義不可辭、事母至孝、承意盡歡、每赴讌集、必懷魚肉遺母、母黨多寒族、雖葭莩之親、必竭力振救、其接物恭遜、處事周詳、衆皆信從、清濁無所失、前娶小松氏、生三男二女、長艮輔、承家、次信二、次逸三、皆夭、長女良、既有歸、次坤、後娶瀧氏、生二女、不育、以安永七年戊戌十一月朔日生、天保二年辛卯三月廿九日卒、享年五十四、私謚曰節孝先生、葬于府城隆專寺先塋之次、

松隱瀧先生墓　石窩撰

先生瀧氏、諱榮、字守恭、號蕉亭、晩號松隱、稱中書、原姓赤松氏、後改今氏、考常安、妣志水氏、安永七年四月十六日、生先生于播之小野、既長、從父徙于津之富松、以儒醫爲業、好多識之學、頗有記性、老益精矣、受學於竹山先生、後寓懷德堂左塾、大阪府帥古河侯別邑平野有鄉學、曰含翠堂、執齋東涯萬年三先生聚徒講習之所也。人亡學廢、荒頓有年、一二同志合議、修拓書堂、迎先生於大坂教授、先生謹默惇質、學通行修、人遵其教、生徒四集、絃誦接響、古河侯以褒徵、固辭不就、天保六年十一月六日發瘍而卒、享年五十八、前娶津田氏、生一女、夭、後娶曲淵氏、生二女二男、女柏、男誠、其餘皆夭、葬于大坂城南国分寺、私謚曰剛正、銘曰、

瞻彼鄉黌　喬松含翠　松隱不見　徽音誰嗣
疾者無醫　學者無師　遺愛銘石　孰不墮淚

天保七年丙申冬十一月

○瀧蕉亭詩　蕉亭先生詩集所載

送脇子善歸豊後　子善有和見蘭室集略

今日相逢傾蓋親、明朝却使別離新、可堪江上飛花晩、送盡殘春又送人、

寄懷脇子善

文藻頻聞海外名、三秋西望不堪情、參商相聚知何日、懷德堂中尋舊盟、

寄李溪居士

當今有逸民、簪裾不可牽、棲遲呉服里、樂此好山川、經史玄亭裡、栞瑟縫帷前、子姪蘭堪比、兄弟璧相連、四明無狂客、誰不識謫仙、飲否酒一斗、不難詩百篇、伊水捉明月、箕阜看瀑泉、風致真適意、好堪終暮年、令弟臨池業、聞説筆如椽、曾見絹素上、龍蛇吐雲烟、才美集一宗、聲名相共傳、嗟我庸劣質、形骫又眇然、箕裘刀圭術、側窺文藝筵、多年慕高蹤、通刺無良緣、況復風塵隔、何日得周旋、

寄懷仙坡先生在燕都

遠遊書劍墨河滸、五十三亭少信音、遙識秋堂群彦會、却教鱸膾促歸心、

此ノ外蕉園ニ寄セタル詩二三首アリ、蕉園遺事中ニ録スベシ。

瀧蕉亭ハ、懷德書院ニアリシ時、其左塾ノ桃舍ニ寄寓シタリ。

（清真学園高等学校教諭）